学校の活力を生み出す生徒指導とは

―― あいさつ運動の教育的効果について ――

芳野　真里

Mari YOSHINO

（要旨）

本論は学校の活力を生み出すための生徒指導の一環として、社会性を育てていく上で必要とされるあいさつ運動を取り上げ、学校全体で活性化が図れるような活動の教育的効果について検討することを研究目的とした。ここでは基本的な生活習慣のねらいについて明らかにするとともに、筆者自身の母校が実施していたあいさつ運動の取り組みやその効果を事例として研究した。研究の結果、あいさつ運動の効果をあげるためには、児童生徒の自主性を大切にするという視点に立って、子どもたちと教師間の人間関係の確立と家庭や地域社会と効果的な連携を図ることが必要であることを解明した。その際、道徳や特別活動の目標に関わる共通点に視点を持つこと、児童生徒とよりよい関係を築くために教師に求められる資質を導入すること、家庭や地域に理解や協力を求める必要性があること、さらに問題行動を未然に防止する予防的指導を推進していくことは重要であること等を提示した。

キーワード：基本的な生活習慣、規範意識、自主性、教師の資質、地域連携

神戸学院大学人文学部人文学科４年次生

はじめに

今日の現代社会では、「社会や生活様式の変化に伴い、「生徒指導」にかかわる課題も多様化、複雑化」[1] し、様々な局面で困難な問題に突き当たることが多くなってきた。遅刻や早退、授業中の学習態度、基本的な生活習慣、服装、人間関係の問題など、日常的な問題に加え、「学級がうまく機能しない状況、不登校や中途退学、いじめや暴力行為等も依然として深刻な状況」[2] である。また、未成年者の喫煙・飲酒等の問題や、非行の多様化など学校教育や学校生活をめぐる問題は深刻であり、生徒指導上の問題は、多方面に拡がっているのが現状である。子どもたちに、分かりやすい授業をすることが、教師の仕事であることは言うまでもないが、授業に向かう姿勢が子どものなかに確立していることが前提としてあるといえるだろう。学校の活力を生み出すためには、学校の中だけにとどまらず、学校外の環境変化に応じた学校改善が重要となる。活力のある学校とは、子どもたちが楽しく学習でき、保護者や地域住民から信頼される学校である。しかし、少子化に伴い、地域の子どもを地域で育てる教育活動がみられなくなってきている。その意味で、生徒指導は学習指導に役立つ重要な役割を担っているといえる。それでは、具体的にどのような生徒指導を行なえばよいのだろうか。

１．生徒指導における基本的生活習慣の指導のねらい

学校教育においては、学習指導要領に基づき、道徳や特別活動を始め、学校の教育活動全体を通じて、基本的な生活習慣の形成を図るための指導が行われている。特に、小学校段階においては、「基本的な生活習慣や社会生活上のきまりを身に付けること、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないようにすること」[3] の指導に重点を置き、道徳教育において充実を図っている。また、中学校の道徳教育においても、望ましい自己の形成を図ることに関する視点として、「望ましい生活習慣を身に付けることは、心身の健康を増進し、気力と活力に満ちあふれた充実した人生を送る上で欠くことのできないものである。心身を鍛え、調和のある生活をすることは人格形成にも深くかかわる」[4] とされている。

基本的な生活習慣は、人間のあらゆる態度や行動の基本になるものであり、「人間として最も基礎的かつ日常的な行動の在り方を、自然的、自動的に行為すること」[5] と定義されている。一般的に、食事、睡眠、排泄などの生存に必要なものや、礼儀作法、規則の尊重など社会生活に必要な条件を満たすものなどが挙げられている。つまり、一人一人が身につけておくことが必要な行動の仕方であると考えられる。日常生活を健康で安全に過ごすために、また家族や友達など周囲の人々と人間関係を維持させるためにも、基本的な生活習慣を身に付けさせることは極めて重要である。学校で指導すべき基本的生活習慣は大きく分けて以下の３つである[6]。

①生命尊重、健康に関すること。

②規則やきまりのある生活に関すること。

③人間関係づくりに関すること。

「人間関係づくりに関することでは、あいさつ、正しい言葉遣い、意思を伝える、約束

を守る、生活態度など」[7] が、日常で望ましい人間関係を維持していくために重要であるとされている。

基本的な生活習慣の指導は、児童生徒が自らの行動やきまりの意味と理由を理解し、日常生活において好ましい行動をとれるようになることを目指しているため、「具体的・系統的・継続的に進めていく」[8] 必要があるとされている。基本的な生活習慣を形成するために、先に述べた３つの内容が学校生活の様々な場面で実施されているが、基本的な指導の流れとして、次の５つに分類される[9]。

①基本的な生活習慣（身辺自立、整理・整頓）

②対人関係（コミュニケーション能力、相互理解、相互啓発）

③集団活動（所属感、役割、自己有用感）

④規範意識（自己コントロール、ルールの尊重、自己決定）

⑤社会生活（家庭・社会の一員としての自覚）

人間性と社会性を育むことを目的としている規範意識と対人関係については、重点的に取り組まなければならないものとされている。人間は、人との交わりの中ではじめて自分を知り、相手の言葉や相手との関わりを通して自分の存在を感じ、自尊感情が育まれていく。児童生徒に基本的な生活習慣を適切に身に付けさせるためには、指導のねらいを正しく理解し、子どもたちの発達の特徴を把握したうえで、効果的な指導方法を工夫することが求められる。

基本的な生活習慣の指導には、次の５つのポイントがあるとされている[10]。

①生活上の一定の行為の型を指導する

②できるだけ早い時期から具体的・系統的・継続的に指導する

③道徳的実践力につなげていくように指導する

④自立的行為に発展するように指導する

⑤教師は人間性を常に意識し、児童生徒理解に努めながら指導する

基本的な生活習慣の確立は、社会性を身に付けるための基礎となり、児童生徒が習慣として身に付けるべき、もっとも基本となる生活上の習慣である。義務教育段階では、基本的な生活習慣をもとに日常の集団生活を通してルールを守ることの必要性を理解させるとともに、「規律ある行動」[11] を身に付けさせることが大切である。

ところで、「社会やその中に存在する集団の秩序を維持するために機能する基準は、社会規範といわれる。」[12] 中学生になると、集団の規律や社会のルールに従い、仲間と互いに協力しながら自分の責任を果たすことで、集団や社会が成り立っていることを理解できる発達の段階にあるといわれている。そのため教師は、学校生活が、規律や社会的ルールを学ぶ場であるという認識に立ち、学習環境の整備や学校内の規律の維持に取り組む必要がある。社会生活を営む上で必要とされるマナーを体験的に習得させていくことが大切である。「規律が習慣化されるということは、規範が内面化されるということであり、価値の内面化が行われるということである。」[13]

学習指導要領第３章道徳の時間の目標では、基本的な生活習慣との関わりにおいて、「道徳的実践力」[14] である内面的な資質を高めるための道徳教育の育成と合わせて実施してい

くように示されている。児童生徒にとって、学級や学校生活における望ましい集団生活や体験的な活動は、日常生活における道徳的実践の指導をする重要な機会と場であり、道徳教育に果たす役割は大きいとされている。具体的には、自分勝手な行動をとらず節度ある生活をしようとする態度、自己の役割や責任を果たして生活しようとする態度、よりよい人間関係を築こうとする態度、自分たちで約束をつくって守ろうとする態度、目標をもって諸問題を解決しようとする態度等は、集団活動を通して身に付けたい「道徳性」[15] である。道徳性は、児童生徒「自らの生き方への関心に基づいて内側から育てられるものである」[16] ため、教師の一方的な押し付けではなく、自律的に考え、行動することのできる主体的な子どもたちの育成を目指していくことが大切であるといえる。このような力を身に付けさせるためには、児童生徒の発達段階に応じて、基本的な生活習慣を確立させるとともに、規範意識に基づいた行動様式を定着させることが重要である。子どもたちが自律心を高めていくためには、豊かな人間関係が大切である。私たちの毎日の生活の中で繰り返される無意識な行動が、きちんとした規律を身につけていくことで、気持ちのいい生活ができ、地域社会とのつながりも円滑なものになっていくと捉えることができる。

生徒指導は、学校の教育目標を達成するために重要な機能の一つであり、「児童生徒一人一人の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、同時に公共の精神や社会規範を尊重する意識や態度に基づいて、自主的・自律的に判断、行動し、積極的に自己を生かすことができるよう社会的資質や能力・態度を育成していくための援助・指導であり、将来、社会的に自己実現ができるよう自己指導能力の育成を目指すものである」[17] と定義されている。学校生活を営む上で必要な規範意識を育成すると同時に、児童生徒一人一人が公共の精神や社会規範との関連において自己実現を図れるよう、自己指導能力を身に付けさせることが一層大切になってくる。つまり、生徒指導は、教育活動のすべてにおいて、その教育目標を達成していくための基盤となるものであり、児童生徒の人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活がすべての子どもたちにとって有意義で、充実したものになるようにすることを目指すものである。

２．あいさつの重要性とポイント　―現代の子どもたちの周囲を取り巻く環境―

「基本的習慣は、家庭において、ある程度の土台がつくられる」[18] とされている。しかし今日の子どもたちの課題として、家族構成の変化、家族関係・対人関係の希薄化、生活様式の著しい変化、教育機能の低下等、家庭状況が変化するなかで、社会性を身に付ける機会が減少し、規範意識が希薄になっていることが指摘されている。そのため、小学校段階から教育活動全体を通して子ども同士が交流する場を与えることが、基本的な生活習慣を身につけるための土台づくりにつながると考えられている。核家族化、都市化がさらに進む中、対人関係を育む環境が子どもたちの周りに少なくなっているのが現状であり、インターネットやテレビゲーム、携帯電話などの情報技術が発展し、普及してきた影響でさまざまな問題が発生し、現代の子どもたちの課題となっている。子どもたちを取り巻くそういった環境の変化の中で、そういった社会的に危険なものに目を向けながら、学校の生徒指導の在り方を考えていくことが大切であるといえる。

そこで注目したのが、誰もが多くの人と毎日交わすあいさつである。社会には、数えきれないほど多くのあいさつがあり、私たちは相手と接するとき、あるいは別れるときに、その言葉を上手に使い分けて、コミュニケーションをとっている。また、小学校や中学校の教室や廊下、あるいは通学路などで「元気に明るくあいさつをしよう」「気持ちのいいあいさつをしよう」「笑顔であいさつをしよう」という掲示物を見かける。ほとんどすべての学校で「あいさつをしっかりしましょう」と指導され、あいさつの大切さを子どもたちに身に付けさせようと様々な方法で働きかけている。しかし、そもそもどうして多くの学校であいさつ運動が取り入れられているのだろうか。

あいさつを漢字で表すと、「挨拶」と書くが、「挨」という字には、心を開くという意味、「拶」には、その心に近づくという意味がある。あいさつは、「自分の心を開くことで、相手の心を開かせ、相手の心に近づいていく積極的な行為」[19] である。また、「複雑な人間関係の中で、自他共に人格の尊厳を認め合い、お互いの人間性をより豊かに実現するための言語、動作」[20] でもある。あいさつは、他人同士が出会って接するとき、最初に投げかけられる言葉や仕草のことであり、人間関係をスタートさせるためのコミュニケーションの第一歩であるといえる。あいさつはコミュニケーションの基本であり、あいさつを通して、児童生徒の公共心や社会性を育むことは大切であるだろう。あいさつが上手くできないと、相手に対して自分の印象が悪くなってしまい、円滑なコミュニケーションができなくなってしまう。また、自然にあいさつができるようになることは、多くの人と支え合いながら生きている社会の一員として大切なことであり、学校で取り組まれているあいさつ運動は、学校生活全体のマナー向上を目指すための大切な活動であるだろう。

では、あいさつをするとき、相手に好印象を与えるために大切なことはどのようなことなのだろうか。また、あいさつを習慣づけるためには、どのような指導の工夫が必要なのだろうか。

あいさつをするときのポイントは、「（あ）かるく、（い）つも、（さ）きに、（つ）づけて」[21] とされている。まずは、相手にきちんと伝わるあいさつをするために、【相手の目を見て、明るく、元気よく心を込めて声をかける】ことが基本となる。自分ではあいさつをしたつもりでも、小さい声であいさつをするだけでは、相手にきちんと伝わらない。明るい表情でハキハキとあいさつすることによって相手にいい印象を与えるだろう。相手が何かに集中しているときなど、あいさつをしにくい状況に出くわすこともあるが、そのような場合は軽く会釈をするなど、【あいさつは欠かさずにする】ことが大切であるだろう。あいさつは、相手の警戒心を解き、相手の存在を認識しているという姿勢を示すため、相手に好意的な印象を与えられる効果がある。また、あいさつをするタイミングも重要であるといえる。【相手より先に、率先してあいさつをする】気持ちが大切である。相手があいさつをしたら、自分もすればいいというのではなく、自分から進んでする気持ちを強く意識することが大切である。「もし相手があいさつを返してくれなかったらどうしよう」と不安になり、あいさつが人間関係を築く上で大切なものであると頭ではわかっていても、なかなか実行できない人は多くいる。しかし、自分から進んであいさつをすることで、印象がよくなるだけでなく、相手との会話がスムーズに続けられるだろう。また、あいさつは、【いつ

でも、どこでも、すべての人に対してする】ことが大切である。あいさつに応えてくれない相手でも、あきらめずに続けていれば、いつか相手に届き、必ず返してくれるようになるだろう。あいさつは相手のためでもあるが、何よりも自分の気持ちを高める作用があるため、自分がその日一日を元気に過ごすために大切な行動でもある。一人一人があいさつを自分から進んでするようになると、学校全体で取り組む元気なあいさつや声かけは、学校の雰囲気が明るくなり、学校全体に活気を生むことの効果につながるだろう。

３．実際のあいさつ運動の取り組みとその教育的効果

子どもたちが健やかに成長していくためには、適切な運動、バランスのとれた食事、十分な休養・睡眠が大切である。また、そうした基本的な生活習慣に加えて、時間や約束を守るといった社会的ルールを守るといった社会的習慣を身に付けることは、生涯を通じて大切なことである。人と人が出会ったとき、最初に投げられる言葉があいさつであり、１日を通して、私たちは何度もあいさつを交わしている。これまで、相手に好印象を与えるためのあいさつのポイントについてみてきた。では、あいさつ運動をすることで、どのような効果や効用が表れるのだろうか。そもそも、あいさつ運動をする利点はどのようなことなのだろうか。以下は、筆者自身が母校へ教育実習に行っていたときの体験談である。

かつて筆者が通っていた母校は、下は中学１年生から上は高校３年生まで、各学年３クラスずつあり、全部で18クラスの中高一貫校だった。筆者がまだ在学していた頃は取り入れられていなかったが、教育実習で久しぶりに母校に帰ってみると、「おはよう運動」という新たな活動に生徒たちが意欲的に取り組んでいた。この活動は、学年クラスごとに毎日交代制で、朝正門の近くに一列に整列して、出勤や登校してくる教師や生徒と大きな声であいさつを交わすというものだった。「おはよう運動」には、生徒たちばかりではなく、校長先生をはじめ、生徒指導の先生、担任の先生や副担任の先生も一緒になって取り組んでいた。あいさつをされた生徒たちの反応をみていると、突然たくさんの生徒たちに大きな声であいさつをされ驚く生徒、少し照れながらあいさつをする生徒、そのクラスの生徒や先生に負けないぐらい大きな声であいさつを返す生徒など様々だった。筆者自身実習生ということもあり、毎朝早めに登校していたため、その場で実際先生や生徒と直接あいさつを交わすことはなかったが、職員朝礼前には、その日の「おはよう運動」担当のクラスの生徒が正門に大勢集まり、登校してくる生徒にあいさつをしている光景を校舎の中から毎日見ていた。授業の準備や朝礼などで、残念ながら少しの間しか見ることしかできなかったが、生徒同士が大きな声であいさつしている姿を見ていると、生徒から元気をもらえているような気がした。その活動が気になり、後日その取り組みの目的について、実習担当の先生に尋ねてみたところ、基本的な生活習慣の確立と規範意識の向上を目指して、学校を活気づけるために行われていた。毎日各学年、クラスごとに、「大きな声に心をこめて明るいあいさつ」を目標に、「おはよう運動」というあいさつ運動をするようになったとのことだった。学級委員長を中心に、登校してきた生徒から一列に整列して、生徒同士生き生きした表情に大きな声であいさつを交わしていたのはとても印象的だった。

中高一貫校の長所の１つとして、異年齢の生徒との交流ができることがあげられる。しかし実際は、体育祭や文化祭など学校行事のなかだけに限られているのが現状であった。そのため、毎日交流ができる「おはよう運動」は、先輩後輩関係なく、学年を超えて毎日活動できるものであった。生徒同士の人間関係をより豊かなものにするために、とても効果のある取り組みであるといえる。学級や学年を超えた生徒相互の心の交流を図り、よりよい人間関係を深め、学校の生徒の間に所属感や連帯感を高めていくことは、学校生活を充実していく上で大切なことである。

以上のように筆者の母校では、生徒指導の充実に向けて、毎朝クラス単位で「おはよう運動」が取り組まれていた。あいさつ運動を通して学校を明るくしようと、学校全体で活性化を図っていた。あいさつ運動の効果として、主に次の3つがあげられると考える。

１つ目が、あいさつをする側もされる側も気分がよくなるだけでなく、お互いの人間関係が豊かになることである。あいさつをした自分も気持ちよくその日１日をスタートできるが、あいさつをされた人も、またそれを聞いた人も気分がよくなる。今思い出してみると、筆者が小学生のときには、毎朝登校時に、旗当番の保護者の方や地域の見守り隊の人が通学路で「おはよう」「いってらっしゃい」と声をかけてくれていた。また中学校に入学してからは、校長先生が毎朝欠かさずに、正門の近くに立って生徒一人一人に「おはようございます」と声をかけてくれたり、先生方が交代で通学路に立って「おはよう」とあいさつをしてくれたり、生徒が登校してくるのを見守ってくれていた。筆者自身の学生時代を振り返ってみると、自分からあいさつをすることの方が少なく、相手からあいさつをしてくれることの方が多かった気がする。しかし、あいさつをされると、自然に自分の口からもあいさつができ、沈んだ気分の日でも多少落ち着いた気持ちを取り戻せるようになり、頑張れるような気分になった。あいさつは短い言葉であるため、場合によれば交わす時も一瞬であるが、心を元気にしてくれる不思議な言葉である。あいさつからの交流を通して、教師と児童生徒、あるいは子どもたち同士の人間関係が豊かになるだけでなく、お互いの距離を縮めることができ、親近感や連帯感を持つことにつながる。クラスや学年の友達ばかりではなく、先輩後輩ともお互い顔見知りになり、横とのつながりだけではなく、縦とのつながりを持つきっかけになるだろう。また児童生徒同士だけではなく、先生と子どもたち同士の間や、先生同士の間でも、日常的にあいさつが飛び交うようになれば、活気ある明るい学校になっていくはずである。あいさつ運動は、「生きる力」[22] に掲げられている目標の一つである、豊かな人間性を育む取り組みであるといえるだろう。

２つ目が、顔色や声の調子、表情や目線などを見て児童生徒の状態の変化に気づくことができるため、体調や服装等の確認など、教師は子どもたちの状況を早期に把握する機会になることがあげられる。あいさつ運動を実施するなかで、児童生徒の心のサインを受け止め、早期発見・早期対応が期待でき、問題行動の未然防止や早期解決につながるだろう。教師の取り組み方次第で、子どもたちへの観察意識が高くなり、日常生活における生徒の観察が細かく行えるようになるだろう。特に、筆者自身の学校では、服装の乱れについて、「制服を着ていることは、学校の看板を背負っているのと同じことである」と多くの生徒が

よく指導を受けていた。「地域から信頼される学校」の実現のためにも、あいさつ運動を通して、生徒指導を強化する効果が期待できる。

３つ目が、あいさつをすることが習慣になってくると、学校の中だけに限らず、学校外でも地域の連帯感を高めることができ、児童生徒にとって明るく安全で住みやすい地域社会になるという点である。あいさつをすることで、地域に住んでいる人と子どもたちとがお互い顔見知りになり、気にかけてくれるようになるだろう。地域社会の結びつきを強めていけば、人と人とのつながりが深まるばかりではなく、犯罪者を地域に寄せ付けない安全対策にもつながる。子どもたちにとっても、あいさつ運動を通して地域住民と話すきっかけをつくり、触れ合うことは、社会の一員としての自覚を深めることにつながる。

体験談に戻るが、「おはよう運動」は参加したい生徒を中心に行われているボランティアだった。しかし、どの学年クラスもほとんどの生徒があいさつ運動に参加していたため、学校全体に向上心と連帯感が育まれ、学校への帰属意識が高まっているような気がした。クラス全員で協力しようと、多くの生徒があいさつ運動に参加しようとする姿勢が見られ、自分たちの役目を自覚し行動できるようになっていた。自分たちの学校を自分たちの力で良くしていこうと、あいさつ運動に自主的に取り組んでいたのはとても印象的だった。全校生徒で取り組めるあいさつ運動は、異年齢集団が交流できる活動でもあるため、子どもたちがお互いに学校の仲間同士認め合い、信頼関係が深まっていくだろう。筆者自身の学校では、クラス意識を高めることを目標に掲げ、クラス対抗で朝のあいさつ運動に取り組んでいたため、生徒の行動を変えるきっかけとなり、取り組みを充実させていたように感じた。クラスの全体人数のなかで、あいさつ運動に参加していた生徒の数や声の大きさ、表情の明るさなどを各クラス毎回記録し、一通りすべてのクラスがあいさつ運動に取り組んだ後で、その結果を全校に公開しているため、記録更新を目指して、生徒同士がより積極的に取り組むことができていて、生徒全体の意識が高まっていたように感じた。あいさつ運動に参加することで、生徒の間には連帯感が生まれ、場合によっては、遅刻をしてしまう生徒の数を減らすことができるという効果も期待できるかもしれない。何より生徒自身、自分たちの学校が活性化している様子を実感できるだろう。筆者が登校していた時と違って、大きな声であいさつをする声が学校全体に響き渡り交わされていたので、とても明るくにぎやかな朝だった。

生活様式が多様化し、特に地域でのつながりが築きにくくなっているなか、地域や学校、家庭であいさつを積極的に行っていくことは、コミュニケーションを行い、顔見知りの関係を築くきっかけとなるだけではなく、防犯の面など安全面からも有効な取り組みであるといえる。学校は児童生徒にとって１日の大半を過ごす場であるため、安心できる場でなければならない。そのため、子どもたちの自主性を大切にしながらも、学校の先生や地域の大人が率先して、大きな声であいさつをしてお手本になるということは、子どもたちが豊かな人間関係と住みやすい生活環境を築くために大切なことであるといえる。児童生徒の社会性やよりよい人間関係を育む取り組みは、問題行動の未然防止につながるだろう。「おはよう運動」では、生徒が自発的・自主的に生徒同士の交流を深められるように、全校

一丸となって学校を活性化させる強い意志を持って活動すること、また、各学級の担任・副担任が各クラスのあいさつ運動に参加することを目標としていた。クラス対抗における取り組みへの工夫が生徒に自信を与えていた。あいさつ運動を通して自主的・自発的な活動を体験し、社会性を身に付けることにより、あいさつ運動以外の場面でも望ましい人間関係が構築され、学校生活の様々な場面で意欲的に行動するきっかけにつながるだろう。

４．あいさつ運動において教師に求められる資質

これまで実際のあいさつ運動での取り組みから、その効果についてみてきたが、あいさつだけではなく、時間を守る、食事をきちんととる、整理整頓をする等の「基本的な生活習慣は、さまざまな生活の場において、大人や他者とのかかわりの中で、発達の段階に応じて身につける」[23] ものである。特に、学校で一日の大半を子どもたちと過ごす教師には的確な児童生徒理解を基盤に、児童生徒が好ましい人間関係を構築できるための環境づくりが求められるが、子どもたちが自らあいさつができるようにするために、教師はどのような姿勢・配慮が必要なのだろうか。

まず１つ目に、今回の「おはよう運動」に生徒が積極的に取り組めていた活動の様子から分かるだろう。「おはよう運動」には、生徒だけではなく、各学級の担任の先生や副担任の先生も一緒になり、生徒に対して曖昧な態度を取らず、毅然とした態度で生徒と参加していたからだと考える。取り組みの基盤となったのが、教職員の学校に活気を取り戻したいという強い思いからであり、教職員も生徒と一緒にあいさつ運動に参加することで、生徒が自ら参加する成果を上げる要因となった。子どもたちが自主的、実践的に活動するためには、教師自身が児童生徒のお手本となって、適切な指導・助言をすることが必要であり、職員間の協力体制が重要になってくる。自主的・実践的な態度とは、「望ましい人間関係」[24] を主体的に形成し、「学級や学校づくりに参画するとともに、生活の中で起こる様々な問題や課題について積極的に取り組み、解決していこうとする態度」[25] である。

教師自身が子どもに心を開き笑顔で、あいさつできる人間であることが肝心である。クラスの児童生徒は、受け持っている学級担任の影響が色濃く投影させるため、教師も「指導者」としての姿だけではなく、今日一日をともに過ごす「仲間」として、子どもたちと活動することが大切になってくるだろう。今回のあいさつ運動は、生徒にとって学校がよりよく過ごせる場になるようにするため、学校の現状や課題について基本的な考え方を学校の教職員が整理し、全教職員の間で共通理解が図られていたからこそ、うまく成り立っている取り組みであるといえる。

２つ目は、授業で児童生徒同士が関わり合う時間を多く持たせることである。筆者自身スクールサポーターの活動で、現在小学校でボランティア活動をしているが、授業の補助につかせてもらうとき、筆者が教室に入ると毎回クラス全員であいさつをしてくれる高学年のクラスがある。そのクラスの授業風景を観察していると、授業の中で子どもたち同士の関わり合いを重視していることに気付いた。確かその日は算数の授業であったが、担任が板書した問題を一回自分で解いた後、クラスのみんなでその課題を解決したり、自分の意見を述べたりする活動が多く取り入れられていた。他にも、分からない友達がいると教

えてあげるなど、困っている友達を助けてあげている姿も見られた。低学年のあるクラスでは、朝の会で健康観察をする時間に、子ども同士が順番に友達の名前を呼び合いながら活動していた。担任が児童の名前を読んで、健康状態を確認するのが一般的であると思うが、子ども同士で確認し合っていたのが新鮮だった。「○○さん」「はい元気です。○○さん」「はい元気です。○○さん」…という流れで、先生のタンブリンのリズムに合わせながら、元気よく楽しそうに友達の言葉に応える姿は印象的だった。こうした授業の中での経験を通して、子どもたちは他者を意識した考え方や行動が身に付いていくだろう。相手の存在を認めることで、はじめてコミュニケーションが成り立つものであり、あいさつは相手の存在を認める言葉であるといえる。授業では、教える・教わるという関係だけではなく、友達と一緒に課題を解決する活動を授業の中に多く取り入れていくことが大切になってくるだろう。授業の中で、子どもたちが友達の良さや優しさを実感できるような雰囲気にしていくことが教師には求められる。相手の立場に立った行動ができること、お互いの考えの違いを尊重し、相手の話を聞くことができることなど、人との関わりを大切にした授業内容が大切である。また、子どもたち一人一人の存在を大切にするという意識を持つことが必要である。友達からも自分は大切にされているという感覚を子どもたちに持たせ、自分と相手を大切にする気持ちを育んでいくための指導の工夫が求められる。

３つ目は、「「リフレクション（内省）」の時間を子どもたちに与えていくこと」[26] である。一日の行動を振り返らせることで、自分を意識する時間をつくることが大切である。自分を意識することで、子どもは客観的に自分を見つめることができるようになり、他者から自分がどのように見られたのかを意識できるようになる。筆者自身、実際中学校の朝のホームルーム活動で行っていたのが､黙とうである。その日一日をどのように過ごすのか、自分の気持ちをみつめ、整理する時間があった。一日のはじまりである朝礼や終礼の時間に自分をみつめる時間をとったり、あるいはホームルームの時間にクラスでの生活を見直すための機会をつくったりするなど、子ども同士で話し合う時間を設けることが必要になってくるだろう。

教師にとって、あいさつを習慣として児童生徒に身に付けさせることは大事なことではあるが、子どもの心の成長なしには長続きしないものであるため、強制的にさせるのではなく、多様な児童生徒の心情を十分に理解しながら、柔軟で丁寧に対応できるように指導力の向上を図っていく必要があるだろう。以上のことを踏まえると、あいさつを含め基本的な生活習慣を身に付けさせるには、早期からの対応が効果的であり、小学校・中学校・高等学校のそれぞれの段階に応じた適切な指導が大切になってくる。また、活動の目的意識や活動の方向性などが、時間の経過とともにしだいに希薄化してくる傾向があるが、教師は活動の原点を常に見失わないように再度確認する必要がある。全教職員が指導方針について共通理解をするとともに、お互いに協力する姿勢が何よりも大切であるだろう。学校では、様々な教育活動が行われているが、それらはすべて学校の教育目標を達成するための活動である。そのため「教育目標を理解し、自分の役割とその分担を自覚して目標の達成に貢献しようとする全教師の意欲を高めていく」[27] 必要がある。子どもたちを取り巻く社会や家庭の環境が変化しているなか､「問題行動等の発生を予防し、児童生徒の健全な

成長・発達を促す学校全体の生徒指導体制[28]づくりが一層重要になっている。」[29] 学校教育の充実を図るためには、全教員が協力して、その教育目標の達成に向かって努力を続けることが欠かせないだろう。生徒指導体制を確立し、指導の一貫性と継続性を重視し、厳しくとも温かい毅然とした指導を進めることにより、保護者からの信頼が高まるとともに、子どもたちが落ち着いて学校生活を送れるようになり、問題行動の発生件数も減少させることにつながるだろう。

５．学校と地域や家庭との効果的な連携を目指して

学校生活が子どもたちにとって充実した楽しいものになるためには、「教師と児童生徒との信頼関係が不可欠」[30] であり、子どもたち一人ひとりが集団の中で見過ごされる存在ではなく、一人の人格として認められ、また理解されなくてはならない。あいさつ運動は、その１つの取り組みとして多くの学校で取り入れられている。あいさつは、人と人のかかわりを円滑にし、また豊かにもしてくれる。あいさつをすることで互いの緊張感を和らげ、心を許し、安心し合える雰囲気をつくり出すことができる。これまで、あいさつに対する教員の指導の仕方について学校環境を中心にみてきたが、あいさつが自然にできるようになることに絶大な影響力を持つのは家庭環境でもあるだろう。児童生徒を取り巻く社会環境が急激に変化し、子どもたちの悩みや不安も大きく変化している中、子どもたちの生活指導は学校だけで十分に担いきれるものではなく、学校と家庭などの理解と協力が欠かせないだろう。家庭・地域との連携を推進していく必要があり、学校の教育方針や教師の指導と家庭や地域の人々との教育に対する考え方との間に対立があったのでは、効果を期待することはできない。学校は家庭や地域と関係を築くためにどのように行動すればいいのだろうか。

まずは、生徒指導の基準や指導内容の方針を保護者に知らせることが、学校と家庭の連携・協力につながるだろう。子どもたちの生活習慣や規範意識については、家庭の影響力が大きいため、保護者の理解や協力を得るように取り組んでいくことが必要である。特に保護者の理解を得るためには、学校がどのような基本方針をもっているのかを保護者の側もよく知っておくことが前提として大切である。しかしその時に、一方的に学校の方針を伝えるだけではなく、学校側は、保護者や地域の人の意見や考えも十分に出してもらい、取り入れられるものは最大限に取り入れ、改善していく姿勢を持つことが肝心である。また、取り組みの実態を知らせることが大切である。その基本方針に基づいて実際に生徒指導がどのように行われているのか、その取り組みについて児童生徒がどのように受け止めているのか、そしてその中からどのような問題点が浮かび上がってきているかなどについて情報を提供することが必要である。明るい学校づくりを推進するためには、学校内での行動のみではなく、学校外での問題行動の実態を把握する必要があるため、保護者や地域の人と密接な連絡をとり、理解を深めるような働きかけをすることは重要になってくる。家庭や地域社会と連携するためには、基本的な生活習慣に関する学校の指導方針や指導の実際を、保護者や地域の人に明らかにする必要があるため、学校だより、学年だより、保健・給食だよりなどの学校からの通信から、基本的な生活習慣の形成をめざす学校の指導

方針を知らせ、家庭との協力を強化し、地域社会の協力を得ることが求められる。日頃から家庭への連絡を丁寧に行い、学校と家庭が相互に協力して児童生徒の問題行動に対応することが大切であり、安全で安心な学校づくりを幅広く進めていくためには、学校、家庭及び地域が連携した取り組みが必要になってくるだろう。

６．あいさつ運動における今後の課題　日常のあいさつが持つ力と意味

急速に社会が変化していく中で、日常生活の中でも、パソコンやスマートフォンなど容易に相手とコミュニケーションがとれる便利な道具が普及してきた。しかし、それらと向き合う時間が生活の大部分を占め、多くの人が直接人と接しコミュニケーションをとる機会が減ってきているのが現状ではないだろうか。よりよい人間関係づくりを目指し、豊かな人間性と社会性を育むため、児童生徒の自主性を大事にして取り組むあいさつ運動など、子どもたちの心を育て、暴力行為やいじめなどの問題行動を未然に防止する積極的な生徒指導を推進していくことは重要であるといえる。特に近年、いじめに関する問題行動が発生する傾向があるが、その要因の１つとして、相手のことを理解するなどの思いやりの不足等が考えられる。思いやりや規範意識を育み、問題行動を未然に防止する取り組みを一層進めていくことが重要であるといえる。

あいさつという言葉に直接的な意味はなく、誰もが特に意識せず毎日自然に交わされるものであるため、あいさつを通した一回一回の働きかけの力は本当に小さいものであるかもしれない。しかし、あいさつは相手とのコミュニケーションを取る上で、欠かすことのできない話し始めのきっかけをつくってくれるものである。相手の存在を認め、信頼感や安心感を与えることのできるあいさつは、社会に出てからも大切な習慣であることは間違いないだろう。自然にあいさつができるようになることは、社会を構成する一員として大切なことであるということを、小学校の段階から気持ちのよい明るいあいさつや、時と場をわきまえた言葉遣いが自然にできるように、身に付けさせ指導していくことが求められる。しかし、児童生徒のなかには、生まれつき社会性が低く、コミュニケーションが苦手な子どもたちも存在するということを忘れてはならない。その子どもに応じて柔軟に指導することが大切である。あいさつが溢れる学校にするためには、もちろん大人が習慣として子どもたちに身に付けさせることも大切であるが、強制的に指導するのではなく、子どもたちが自ら実践して「なぜあいさつが必要なのか」「あいさつをするとどのような効果があるのか」などを、自然に感じ取ってもらえるような環境にしていくことが、何より大切であると感じる。

ところで雑誌の記事（今西 2014：12）に、コミュニケーションの理解に関する理論の一つに交流分析という興味深いものが挙げられていたので、ここで紹介しておきたい。コミュニケーションは、言語的なものと非言語的なものに分けられるが、交流分析では、人の心の働きを五つに分けて分析していて、以下の表は、心の五つの働きと非言語的メッセージの関係をまとめたものである。

表　心の５つの働きと非言語的メッセージの関係

声・声の調子	姿勢・動作・表情
断定的、責める、問いつめる、侮辱する、押しつける、強い口調	すぐに批判する、けんか腰で話す、手で机をたたくなど威嚇する、見下げる、特別扱いを要求する
やさしい、安心感、共感的、同情的、あたたかい、やわらかい、はげます	手をさしのべる、保護的な態度、ほほえむ、ゆっくり耳を傾ける、気づかいのある、同じ目線になる
落ち着いた、低い声、淡々とした一定の音調、はっきりとした口調	冷静に行動する、よく観察する、じっと考えをまとめる、相手の目を見て話す、公平、対等な態度
開放的、大きな声、のびのび、自由に、感情的、明るい、楽しそう	自由な感情表現、大げさな身振り、活発に動く、よく笑う、楽観的に、リラックスした、気楽にものを頼む
ぼそぼそ、ぐずぐず、おどおど、遠慮しがち、反抗的、恨みがましい	相手をまともに見ない、気をつかう、機嫌をとる、ため息をつく、同情を誘う、挑戦的

出典　今西一仁　2014　「あいさつの持つ意味と力」『月刊学校教育相談』　2014年12月１日号　p12

人と人とがコミュニケーションをとるとき、言葉によるメッセージの他に、「声の調子や話し方、動作、身振り、間の取り方など」[31]、非言語によるメッセージも相手に伝わるとされている。伝える側は伝えた言葉を意識するが、伝えられた側は言葉以外の部分に強く影響を受けると言われている。つまり、「コミュニケーションでは、言葉として何を伝えたかということだけではなく、何が伝わったかという点も重要」[32] になる。あいさつの質を高めるためには、自分自身が表しがちな非言語的メッセージをチェックし、意識してみることも必要であるだろう。

おわりに

これまで学校生活をより充実したものにするために、あいさつ運動を取り上げ、その教育的効果についてみてきた。基本的な生活習慣の確立も求められる生徒指導は、実際の指導の場面では、児童生徒の集団を対象とすることが多い。しかし、最終のねらいは、その中の個人個人にある。これからの生徒指導は、子どもたちの発達の状況や周囲の環境の変化に応じて、「さまざまな手だてを柔軟に用いて支援していくことがますます求められる。」[33] ただ闇雲に行うだけではなく、一定期間で目標を掲げ、様々な手段や方法を試み、実践していくことが大切である。また、教師は子どもに強制するのではなく、子どもたちの心に火をつけて、児童生徒が自分たちで工夫し、自発的、積極的に実践しようとする態度を育てていくことが重要である。児童生徒一人一人が、様々な集団や社会の一員として生活しているが、「この中で各自の果たす役割は何か、また自分はどのような責任を果たさなければならないのかを自覚することは、集団全体の発展にとっても、個人の成長にとっても、将来社会人として自立していくためにも大切なことである。」[34] 教師のその活動に対する児童生徒の発達段階に応じた効果的な工夫の仕方次第で、子どもたちの取り組み方も変わってくるだろう。

教師と児童生徒の人間関係がよく、生き生きと活動できるということも大切であるが、子どもたちにとって学校が充実した場になるためには、校舎そのものや校舎を取り巻く様々な物理的な環境による影響も見落とすことのできない要素の一つである。学校教育

は、集団での活動や生活を基本とするものであり、学級や学校での人間関係の在り方は、児童生徒一人一人の人格を望ましい方向に完成させるための健全な成長と深く関わっている。そのため、好ましい人間関係を基礎に豊かな集団生活が営まれる学級や学校の教育的環境を形成することは、生徒指導の充実の基盤であり、生徒指導の重要な目標の一つでもある。筆者自身の母校では、生徒たちが学校への愛着を持つことができるように、毎週木曜日の朝礼の時間に、各クラス教室で全校一斉に校歌を歌う時間があった。学校が活性化していくためには、子どもたちと教師とが学校に愛着を持つことに重要な意味があると考える。教師と児童生徒が学校の環境に工夫を凝らし、その充実に向けて努力していけば、子どもたちにとってクラスや学校がより充実した明るく楽しい場になることにつながり、また学級や学校の環境の改善を図ることは、生徒指導を推進していく上でも大きな役割を果たすものである。

注・引用文献・参考文献

1　広岡義之編　2013　『現場と結ぶ教職シリーズ６　教育実践に役立つ生徒指導・進路指導論「生徒指導提要」に触れつつ』　あいり出版　p.103
2　文部科学省国立教育政策研究所　2008　『生徒指導資料第３集　規範意識をはぐくむ生徒指導体制―小学校・中学校・高等学校の実践事例22から学ぶー』　生徒指導研究センター　p.2
3　文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　総則編』　ぎょうせい　p.24
4　文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　道徳編』　日本文教　p.40
5　文部科学省　1985　『小学校における基本的生活習慣の指導　望ましいしつけの工夫』　大蔵省　p.6
6　犬塚文雄編　2006　『社会性と個性を育てる毎日の生徒指導』　図書文化　pp.32-33
7　前掲書６）　p.33
8　前掲書６）　p.34
9　前掲書６）　p.33
10　前掲書６）　p.36
11　集団の統合と維持のため、守られなければならない行動様式。神保信一　原野広太郎編　1982　『規律の内面化を図る生徒指導・相談』　ぎょうせい　pp.148-149
12　前掲書11）　p.148
13　前掲書11）　p.149
14　内面的な道徳的実践力が基盤になければならないものであり、道徳的実践力とは、人間としてよりよく生きていく力。前掲書４）　p.32
15　人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすもの。前掲書４）　p.16
16　前掲書４）　p.35
17　前掲書２）　p.4
18　前掲書６）　p.32
19　「挨拶とは　ビジネスマナーガイド」
（2014年12月4日取得、http://www.tisyk.com/2009/06/post_67.html）
20　前掲書６）　p.36
21　「いつもの挨拶で好感度アップを―ビジネスマナー・ガイドー」
（2014年12月4日取得、http:// ビジネスマナー.biz/100aisa/02222324.html）
22　確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視するものであり、基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに強調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などである。前掲書３）　p.19

23　前掲書１）　p.95
24　豊かで充実した学級生活づくりのために、生徒一人一人が自他の個性を尊重するとともに、集団の一員としてそれぞれが役割と責任を果たし、互いに尊重しよさを認め発揮し合えるような開かれた人間関係。文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　特別活動編』　ぎょうせい　p.25
25　前掲書25）　p.25
26　坂内智之　「子どもの心の成長があいさつを創る」『月刊　学校教育相談』　2014年12月１日号　p.17
27　文部科学省　1975　『生徒指導の推進体制に関する諸問題　―中学校編―』　大蔵省　p.2
28　生徒指導部など校務分掌の組織、学級担任や学年の連携、学校全体の協力体制、組織内のリーダーシップやマネジメントの状況、メンバーの役割分担と意欲、学校と保護者との関係性、さらには関係機関等との連携など、各学校の生徒指導の全体的な仕組みや機能。前掲書２）　p.12
29　前掲書２）　p.12
30　前掲書１）　p.8
31　今西一仁　2014　「あいさつの持つ意味と力」『月刊学校教育相談』　2014年12月１日号　p.11
32　前掲書31）　p.12
33　前掲書６）　p.24
34　前掲書25）　p.9